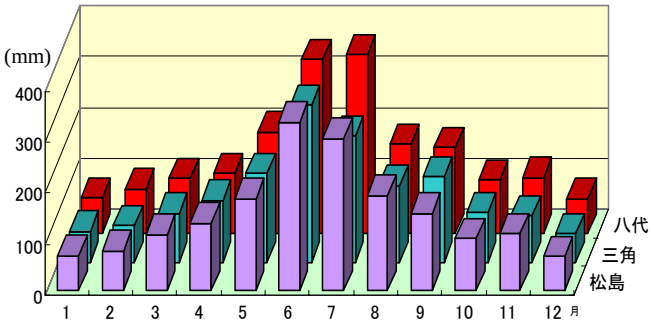
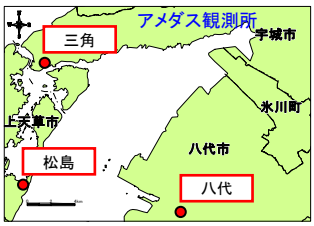
2.3 気象・海象の概況

2.3.1 気象

降水量は６月、７月のそれぞれ約 300mm をピークとし、年間約 2,000mm で、過去 10 ヶ年における日最大降雨量は 181mm(2005 年７月：八代)を記録した。ゴミはこうした６月、７月の豪雨時に多く発生している。

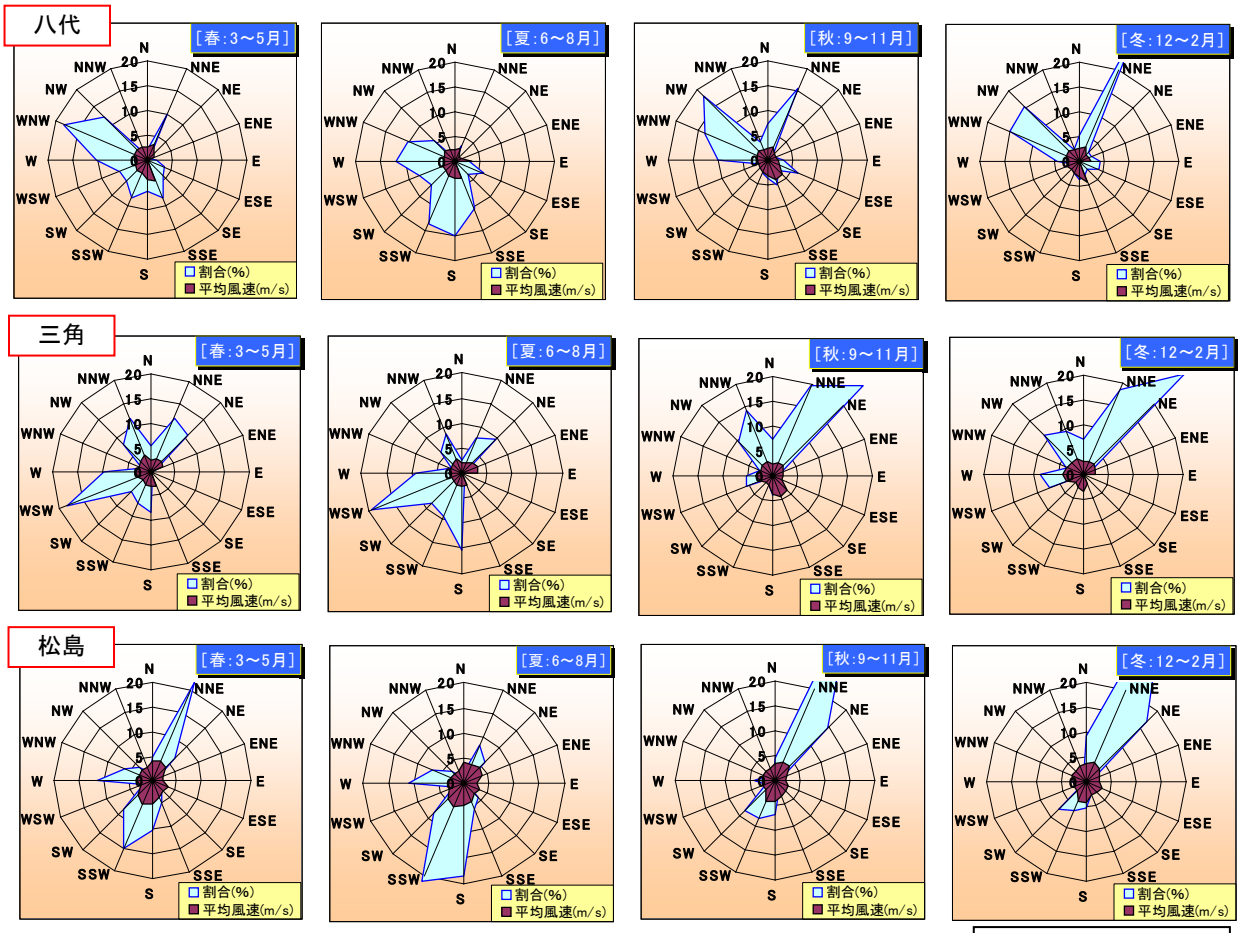




出典)アメダスによる観測データより(1998 年～2007 年)

図 2.7　月別降水量

風は夏に南風、春・秋・冬におおむね北西～北東の風が卓越する。漂流ゴミは地元の方からの話にもあるように、こうした風の影響を受け、海岸付近に溜まりやすくなる。



出典)アメダスによる観測データより(1998 年～2007 年)

※日最大風速・風向の過去 10 ヶ年平均値

図 2.8　風の四季特性

台風の襲来数(100km 圏内)は、年間 0～3 個(年間平均約 1 個)である。1999 年 9 月 24 日の台風 18 号による高潮災害では、松合地区を中心とした沿岸に甚大な被害をもたらした。台風は、集中豪雨に次いでゴミが発生する原因であり、その影響は極めて大きいといえる。

表 2.2　台風の襲来数

月	1998年	1999年	2000年	2001年	2002年	2003年	2004年	2005年	2006年	2007年	計
1月											0
2月											0
3月											0
4月						1					1
5月											0
6月											0
7月										1	1
8月							1		1		2
9月		1					2	1	1		5
10月	1										1
11月											0
12月											0
計	1	1	0	0	0	1	3	1	2	1	10

出典)気象庁ホームページより(1998 年～2007 年)

2.3.2 海象

八代海北部における潮流は、図 2.10 によると、ほぼ 12 時間を周期とした上げ潮と下げ潮により、地形に沿って湾奥と湾央を行き来する。この時の流速は湾央で約 50cm/s、湾奥の河川からも 50cm/s 近い流れが発生している。こうした結果からは、比較的規則的な流れのパターンがみてとれるが、地元漁協の話では、不知火干拓地の南側海域一帯は、反時計回りの流れがみられると言う。干満差約４ｍに及ぶ潮位の変動と干潟や澪を有する複雑な海底地形下においては、海岸付近をはじめ複雑な流れが発生するものと思われる。さらに、風や河川からの流れ、波の影響が加わることで海域での流れは複雑さを増し、滞留するゴミはその時々の気象・海象条件に左右され流動すると思われる。

八代海北部海域に近傍の八代港の潮位は、約 12 時間の周期で、干満差が大潮の頃で約４ｍに及ぶ潮位変動の極めて大きな海域である。

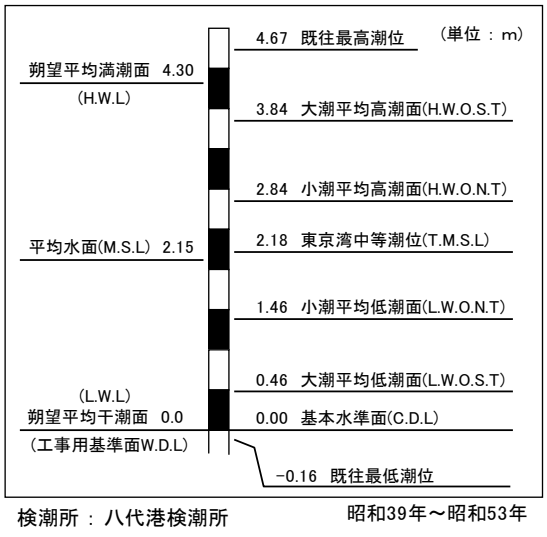
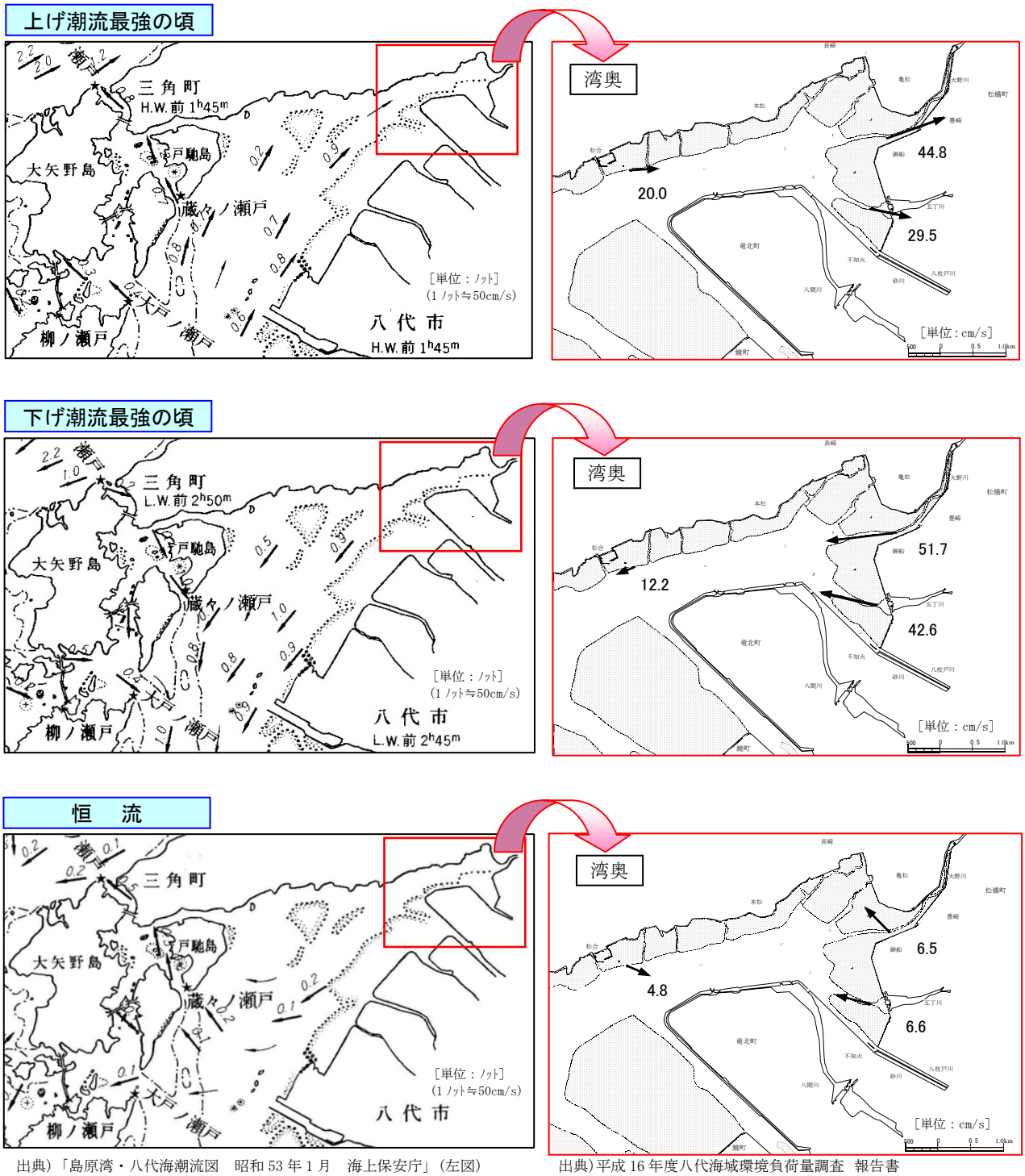


図 2.9　八代港における潮位関係図



出典）「島原湾・八代海潮流図　昭和 53 年 1 月　海上保安庁」（左図）

出典）平成 16 年度八代海域環境負荷量調査　報告書
：国土交通省九州地方整備局　熊本港湾空港整備事務所

図 2.10　大潮の頃の潮流